

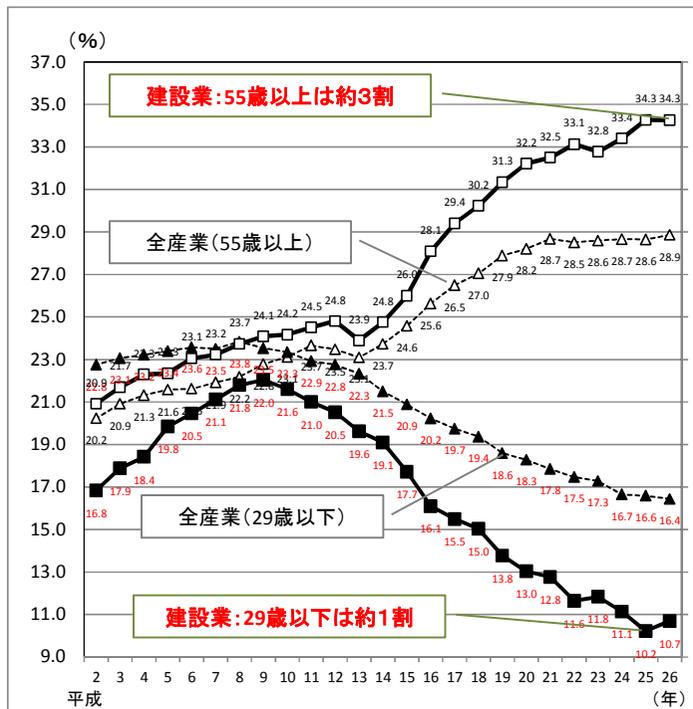
# 技術者の処遇・意欲と資質の向上

---

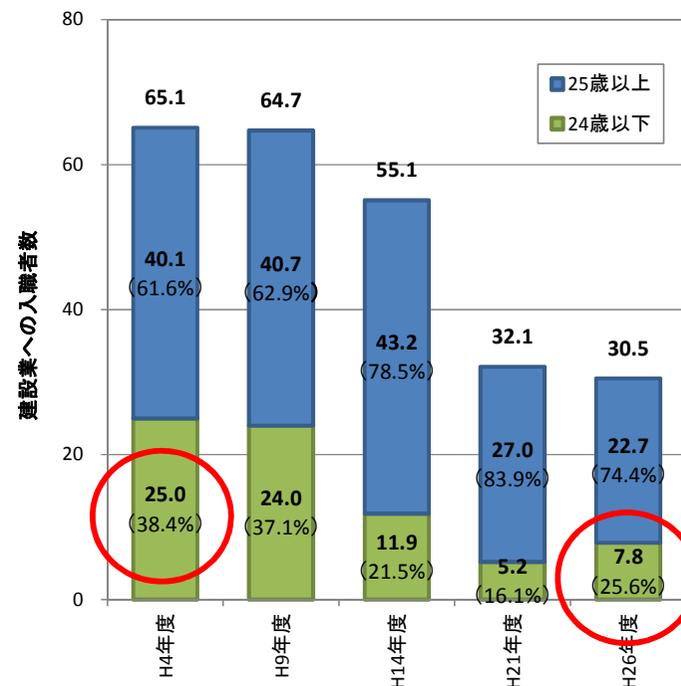
## 【現状整理】 建設業における入職状況

- 建設業就業者数は、55歳以上が約3割、29歳以下が約1割と高齢化が進行している。
- ピーク時に比べ若年層の入職者数は大幅に減少（H26年度の若年層（24歳以下）の入職者数はH4年度に比べて約17万人も減少）。
- また、工業高校の在籍学生数は、S40年度に比べて約37万人も減少している。

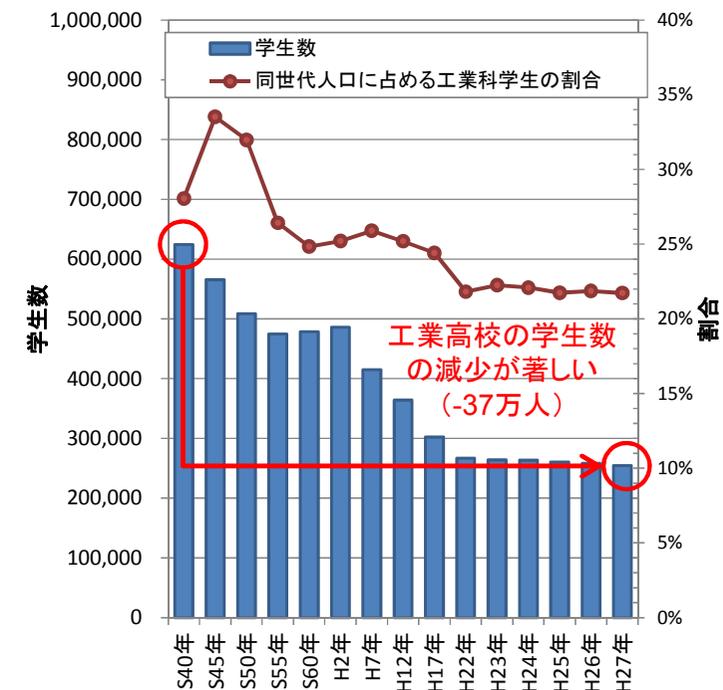
建設業就業者の高齢化の進行<sup>1)</sup>



建設業における入職者数の推移（年齢別）<sup>2)</sup>



工業科学生数と  
同世代人口に占める工業科学生の割合<sup>3)</sup>

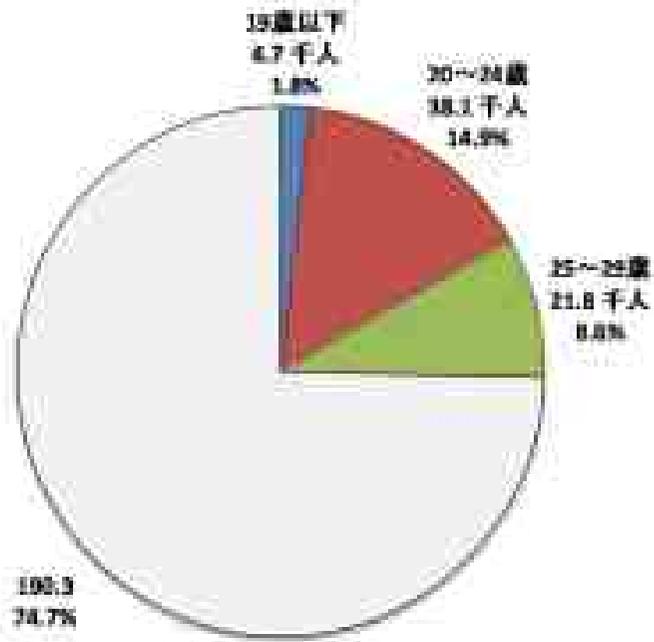


# 技術検定試験の見直し

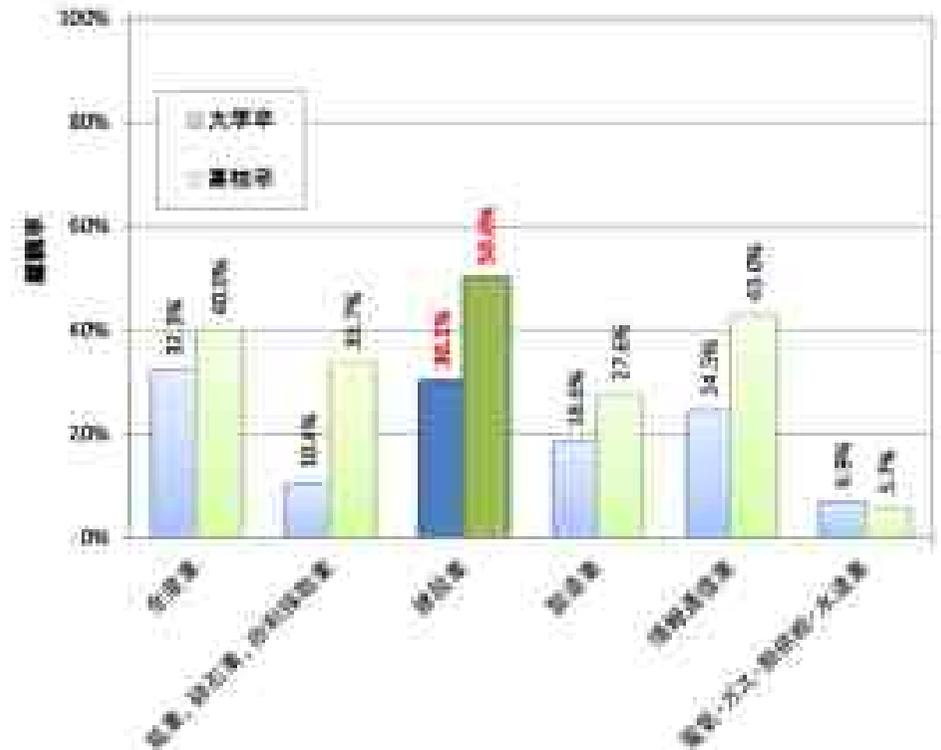
## 【現状整理】建設業における離職状況

- 建設業における離職者数（一般労働者）は若年層（10・20歳代）が全体の25%程度を占めている。
- 入職3年以内の離職率で見ると、大卒者よりも高卒者の方が離職率が高く、3年以内に半数が離職する。

建設業における離職者数（一般労働者）の年齢構成  
(H26年度)<sup>1)</sup>



業種別の新規入職者における入職3年以内の離職率  
(H24.3卒業者)<sup>2)</sup>



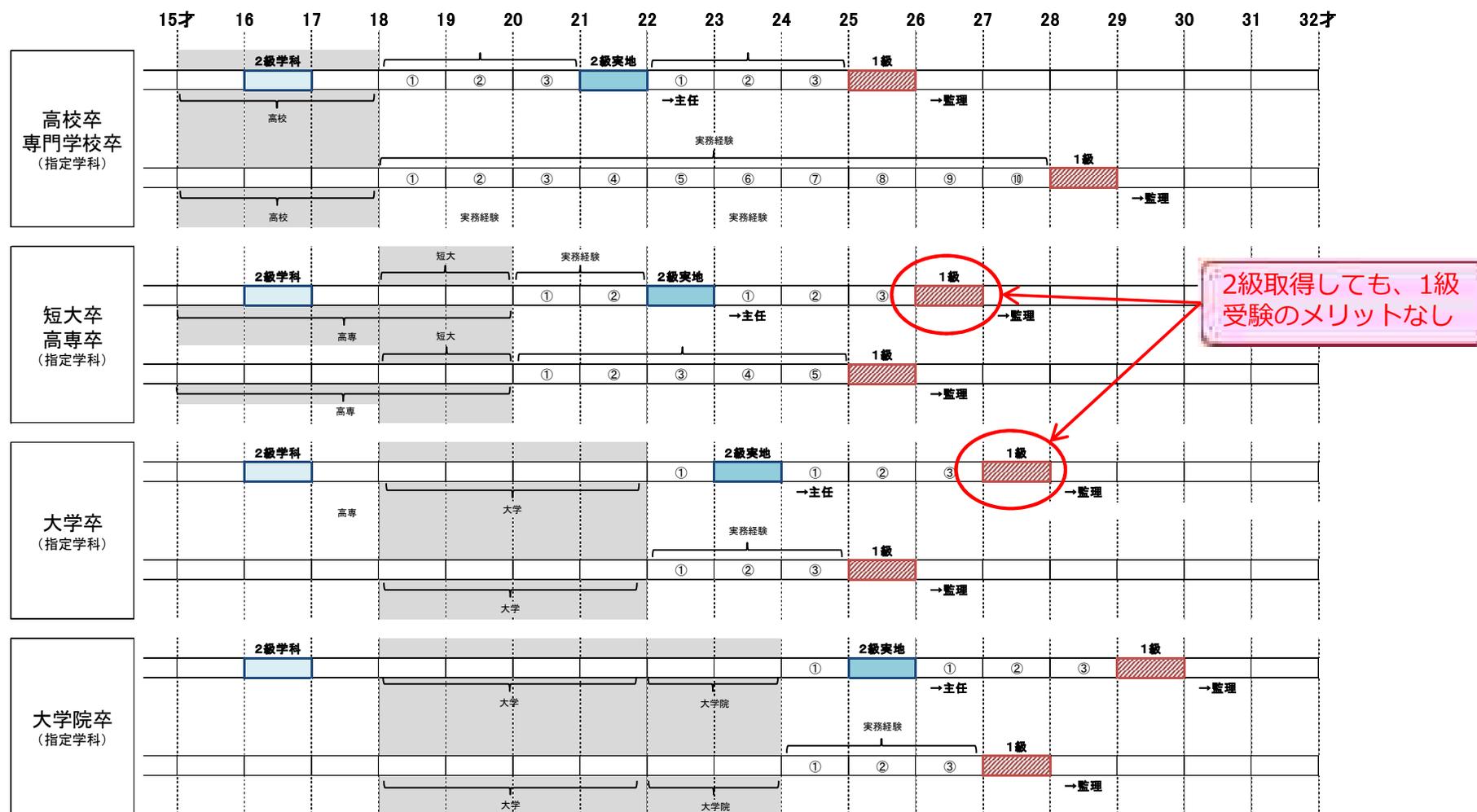
出典) 1) 雇用動向調査 (厚生労働省) より

2) 若者雇用関連データ (厚生労働省) より

# 技術検定試験の見直し

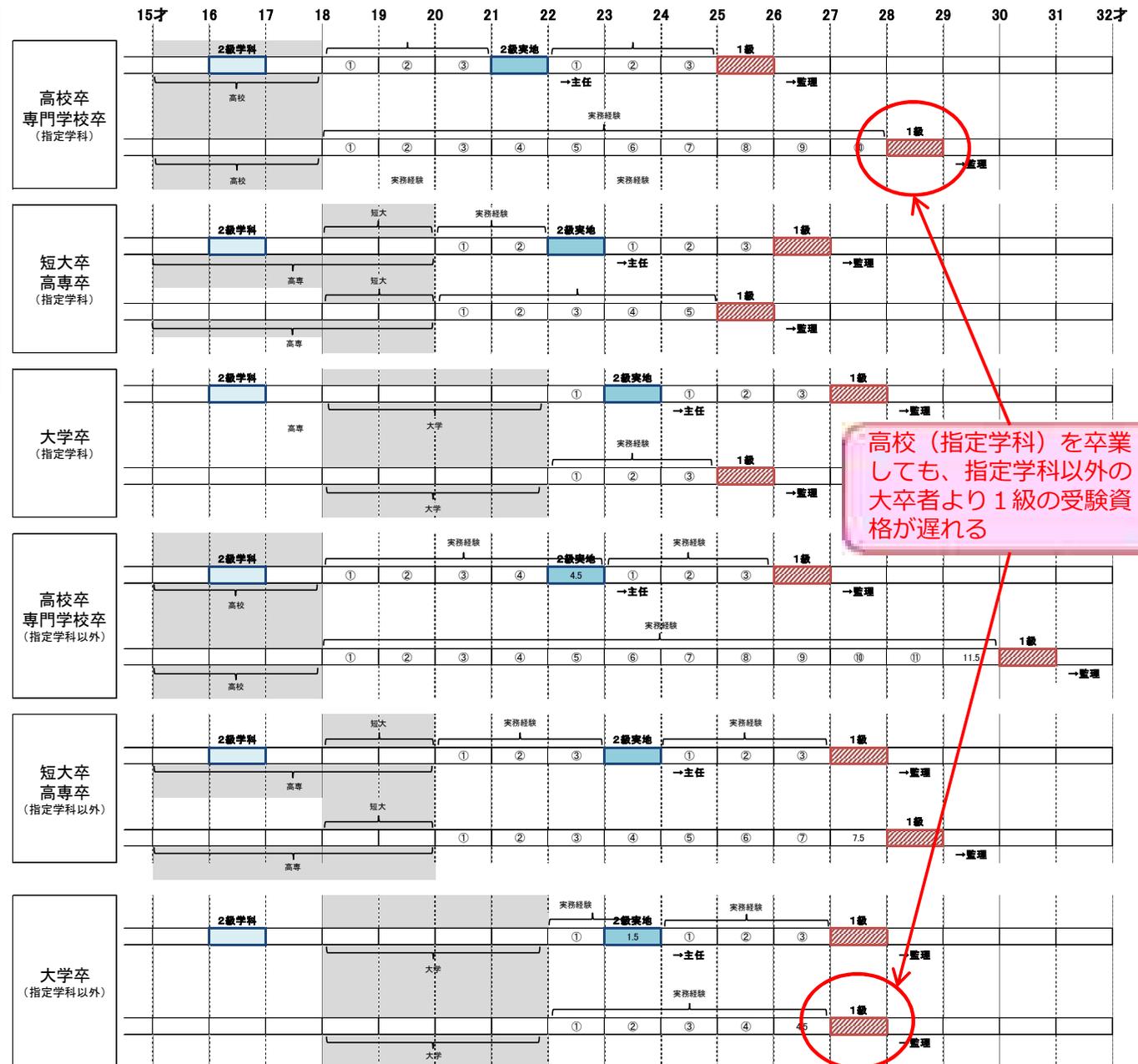
## 【現状整理】 技術検定の受験年齢（指定学科）

- 技術検定の受験年齢（指定学科）をみると、高卒、専門学校卒者については2級取得により、早期に1級を受験できるメリットがあるが、大卒・短大卒・高専卒者については、2級取得による1級受験についてのメリットは無い。



## 【現状整理】技術検定の受験年齢（指定学科と指定学科以外）

・技術検定（1級）の受験年齢（指定学科と指定学科以外）をみると、指定学科の高校卒業生よりも、指定学科以外の大学卒業生の方が早期に受験可能となっている。



高校（指定学科）を卒業しても、指定学科以外の大卒者より1級の受験資格が遅れる

## 背景

### ○建設業の現状

- ・高齢者の大量離職を目前に控え、将来、深刻な担い手不足が懸念。
- ・ピーク時に比べ若年層の入職者数は大幅に減少、入職後の離職率は他産業より高い。

### ○技術検定試験の現状

- ・受検者数が減少傾向
- ・受検者・合格者の平均年齢が上昇傾向。

○担い手確保に向けては、労働環境・処遇の向上や戦略的な広報等の取組を引き続き行っていく必要があるが、**「資格取得により、他業種への就職の流れを抑制できるのではないか」との仮説のもと、技術検定制度の面からの取り組みについて検討。**

○求める技術力は維持しつつ、若年層への受験機会の拡大や受験要件の緩和により、「早期資格の取得を促進」することで、「建設業界へ在職する動機付け」の強化を図る。

## 受験機会の拡大に対するこれまでの取組

- ・2級学科試験の早期受験
- ・2級学科試験の会場拡大
- ・実務経験年数の基準日の見直し

### 【効果】

- ・高校在生を含め、若年世代の受験者数が増加。
- ・2級学科早期試験の合格者は、その後の実地及び1級試験への早期受験の傾向や、高い合格率が確認。

## さらなる見直しの可能性

- ・2級学科試験の年2回実施
- ・学科試験合格者に対する「士補」の付与
- ・1級学科試験の早期受験 等

実施の対象とする試験種目、導入時期等、具体的内容について引き続き検討。

若年層の受験者が多く、かつ、その後の資格取得の早期化がみられる等、担い手確保の効果が高い「2級学科試験」について、受験機会の拡大に重点的に取り組むとともに、「1級試験」についても受験要件の緩和に取り組む。

# 技術検定試験の見直し

## 1) 試験の年2回実施

- ・ 担い手確保の観点から、現在、年1回実施している試験の年2回化について検討できないか
- ・ 現在、経済財政諮問会議で議論されている「経済財政運営と改革の基本方針2016(素案)」においても、人材の確保・育成の観点から、試験の年2回化について検討するとの記載。

経済財政運営と改革の基本方針2016(素案) 平成28年5月18日

(2) 社会資本整備等／⑤戦略的な社会資本整備

(中略)

現場の担い手を確保するため、若者が希望をもって建設産業に入職できるよう中長期的な人材の確保・育成の具体的な方策を講じていくほか、施工管理技術に関する公的資格試験を年2回にするなどの受験機会の拡充について検討する。

(後略)

### 試験の年2回化を実施するにあたっての主な課題

- ① 試験スケジュールの見直し
- ② 試験会場の確保
- ③ 会場費用や人件費(作問、採点、監督等)増加に伴う費用の確保

# 技術検定試験の見直し

## 1) 試験の年2回実施

- 建設業法に基づく施工に関する技術検定は、土木、建築、管工事、電気工事、建設機械、造園の6種類それぞれ1級、2級があり、学科試験及び実地試験により構成。
- 受験者数は3万人を超えるものから、5千人以下のものまで、幅は大きい。

各技術検定の受験者数・合格者数（H27年度）

		学科試験						実地試験		
		受験者数			うち、学科のみ受験			受験者数		
					合格者数	合格率	受験者数			
土木	1級	35,810	19,551	55%	—			27,547	10,266	37%
	2級	33,914	22,536	66%	5,663	2,836	50%	25,052	11,518	46%
建築	1級	25,452	13,355	52%	—			16,365	6,180	38%
	2級	27,592	13,385	49%	6,110	2,890	47%	14,061	7,822	56%
管工事	1級	16,517	8,458	51%	—			10,620	5,317	50%
	2級	12,291	7,120	58%	520	356	68%	9,595	6,474	67%
電気工事	1級	18,122	8,168	45%	—			9,613	6,099	63%
	2級	8,366	4,618	55%	1,213	776	64%	4,976	3,195	64%
建設機械	1級	3,544	1,207	34%	—			1,312	1,133	86%
	2級	7,543	3,976	53%	—（※H28年度より実施）			4,144	3,657	88%
造園	1級	4,187	2,015	48%	—			2,973	1,093	37%
	2級	4,158	2,487	60%	486	204	42%	3,280	1,296	40%

# 技術検定試験の見直し

## 1) 試験の年2回実施

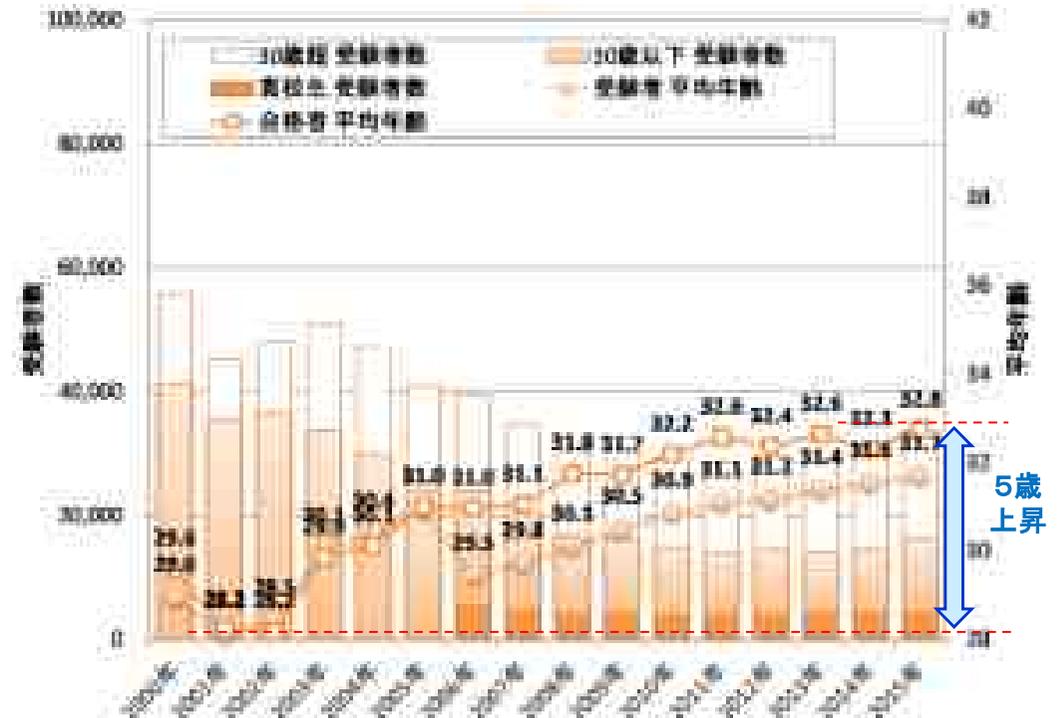
### 受験者の年齢構成の推移 (土木)

- 1級・2級とも受験者数が減少し、受験者・合格者の平均年齢は上昇傾向。特に2級学科試験合格者の平均年齢が顕著。
- 1級に比べ2級は若年層の受験者が多く、約40%が30歳未満。
- 今年度より2級学科受験を17歳から受験可能とした結果、17歳については約450人の申込みがされ、高校生全体の申込者数は昨年度に比べ約25%増加。

【1級学科】受験者(土木)の年齢構成の推移<sup>1)</sup>



【2級学科】受験者(土木)の年齢構成の推移<sup>1)</sup>



出典) 1) 2) (土木) 施工管理技術検定データより

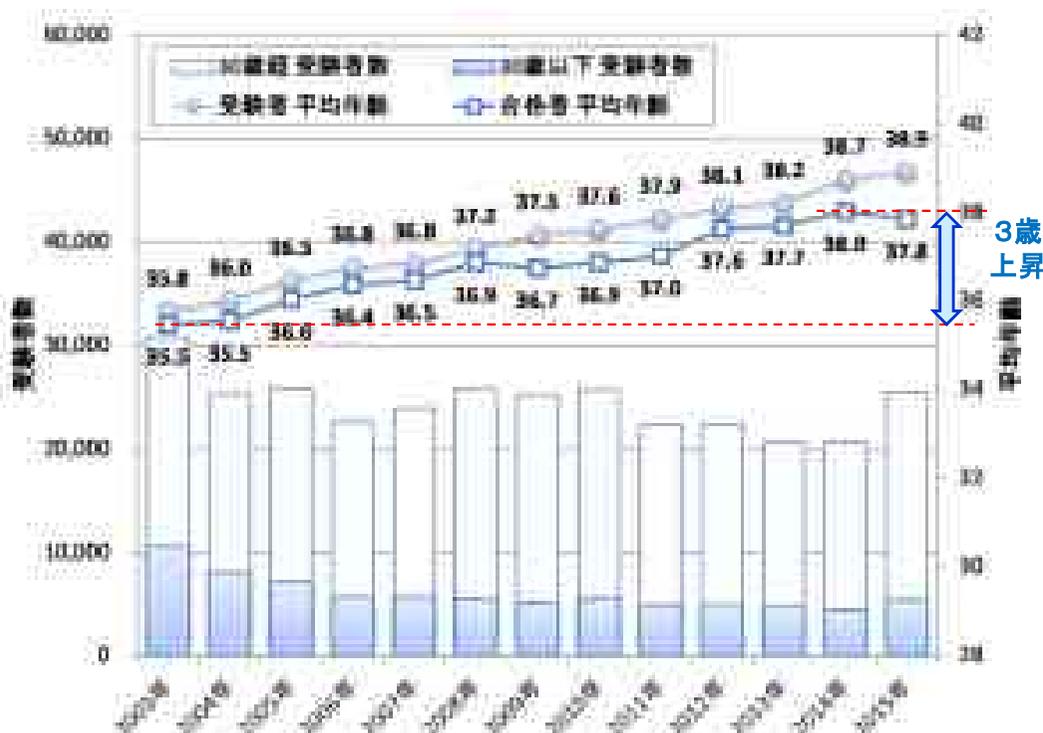
# 技術検定試験の見直し

## 1) 試験の年2回実施

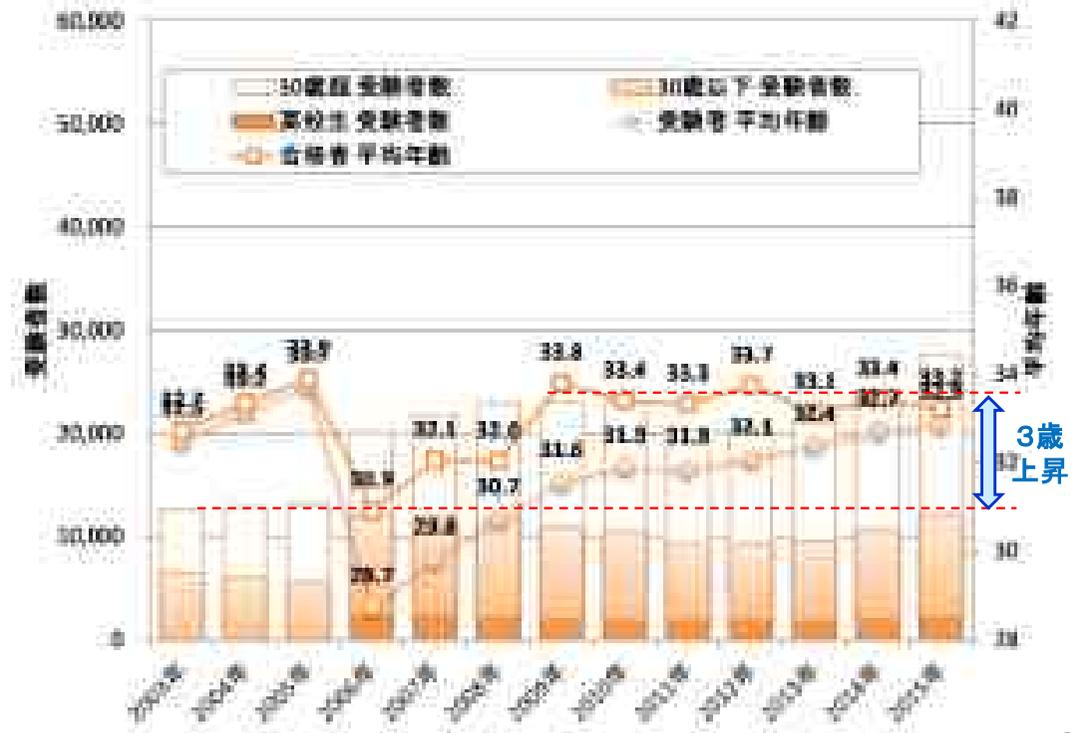
### 受験者の年齢構成の推移 (建築)

- 1級試験については受験者数が横ばい、2級試験については受験者数が増加傾向。
- 受験者・合格者の平均年齢は、2級については「学科のみ試験」の導入により一旦下降したが、近年、1級・2級ともに上昇傾向。
- 土木と同様、1級試験に比べ2級試験は若年層の受験者が多く、約40%が30歳未満。

【1級学科】受験者数(建築)・平均年齢の推移<sup>1)</sup>



【2級学科】受験者数(建築)・平均年齢の推移<sup>2)</sup>



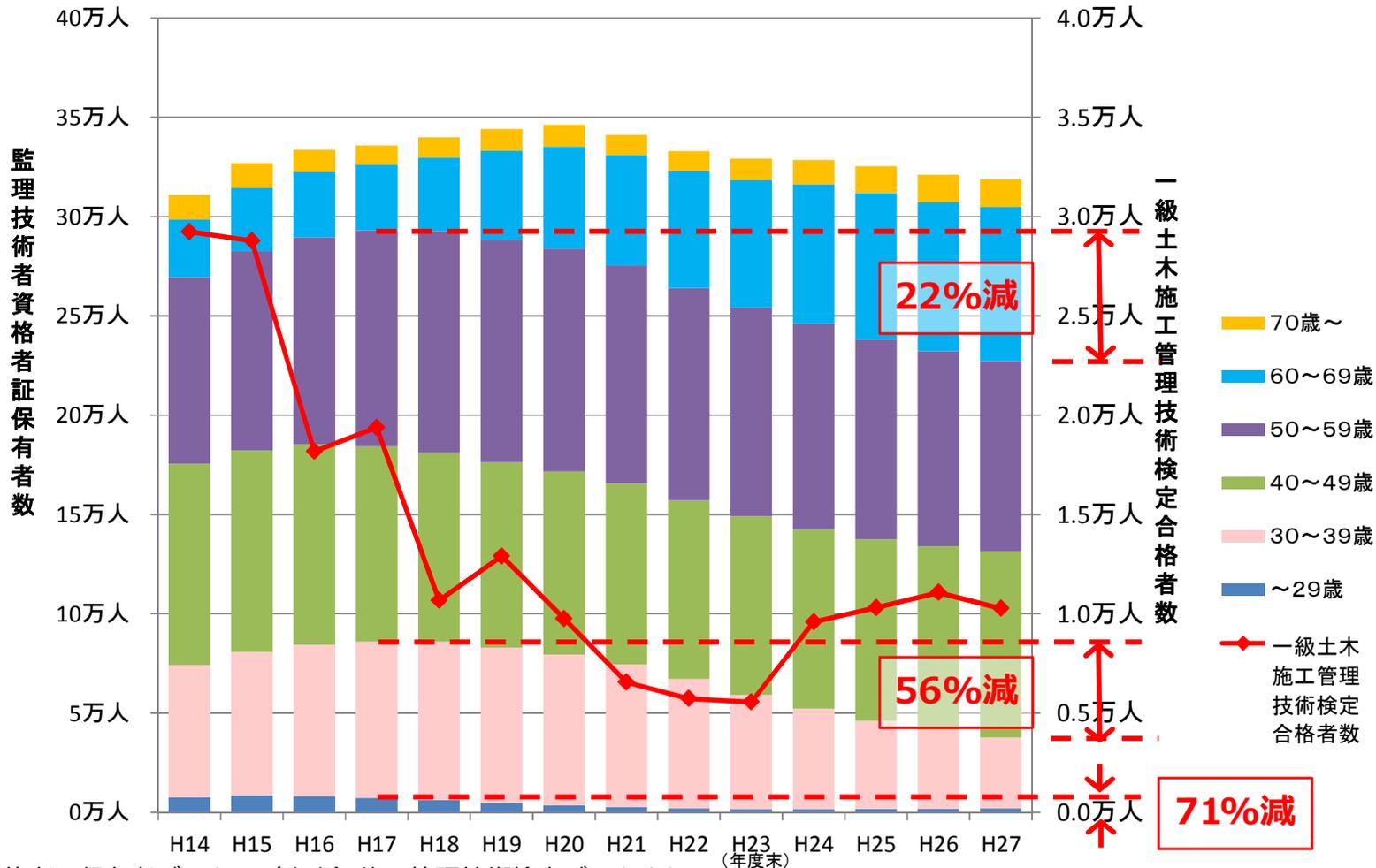
出典) 1) 2) (建築) 施工管理技術検定データより

## 1) 試験の年2回実施

### 1級土木施工管理技士による監理技術者資格者証保有者数の推移

- 60歳未満の1級施工管理技士による監理技術者資格者証保有者は、H17年度をピークに減少。特に40歳未満をみると56%減少、30歳未満は71%減少と大幅に減少している。

1級土木施工管理技士による監理技術者資格者証保有者数の推移



出典) 監理技術者資格者証保有者データ、(土木) 施工管理技術検定データより

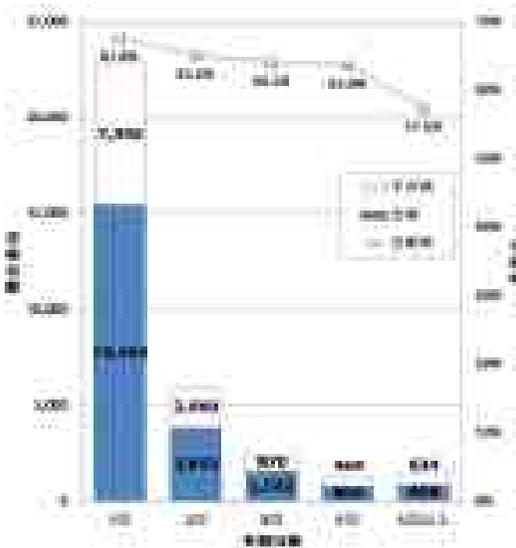
# 技術検定試験の見直し

## 1) 試験の年2回実施

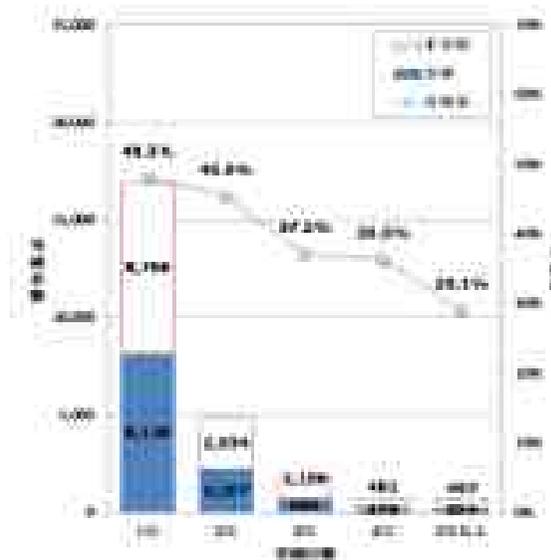
- 2級学科試験は実地試験に比べ、受験回数による合格率があまり変わらない傾向。
- 高校生の受験動向をみると、在学中に受験して不合格となった後、卒業後翌年に再受験をする受験者は大幅に減少する傾向がみられる。

➡ 年2回実施することにより、高校在学中の受験機会も増加し、合格者数増となる可能性。

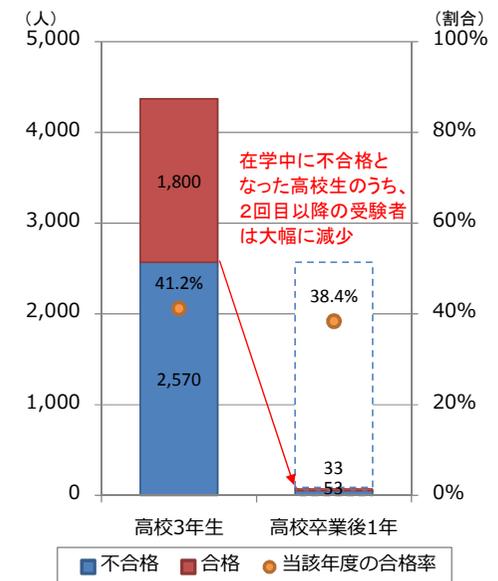
【2級学科】受験回数別の合格率<sup>2)</sup>



【2級実地】受験回数別の合格率<sup>3)</sup>



【高校3年生】  
2級学科早期試験不合格者の次年度の受験状況<sup>1)</sup>



出典) 1) 2) 3) (土木) 施工管理技術検定データより

- 担い手の確保の観点から、若年層の受験者が多く、かつ、高校在学中の合格者の増加が期待できる「2級学科試験」について、年2回化の検討を進める

(実施の対象とする試験種目及び導入時期については今後検討)

# 技術検定試験の見直し

## 2) 学科試験合格者に対する「士補」の付与

- ・ 入職者の確保や、資格取得意識の醸成を図るため、学科合格者に対して新たな名称「士補」を付与することを検討。

### 「士補」制度を導入している他資格における「士補」の位置付け（例）

資格名称	資格者の位置づけ
技術士補 (文部科学省)	技術士となるのに必要な技能を習得するため、技術士を補助する者
測量士補 (国土交通省)	測量士の作製した計画に従って測量に従事する者
土木鋼構造物 診断士補 (民間資格)	診断士となるための能力や技術を習得すること、診断士の業務を補助する者
建築積算士補 (民間資格)	建築物の工事費算定について、適性な基礎知識を有する者

- ・ 導入に向け、引き続き、実態調査・整理を進める  
(具体的な制度設計及び導入時期についても今後検討)

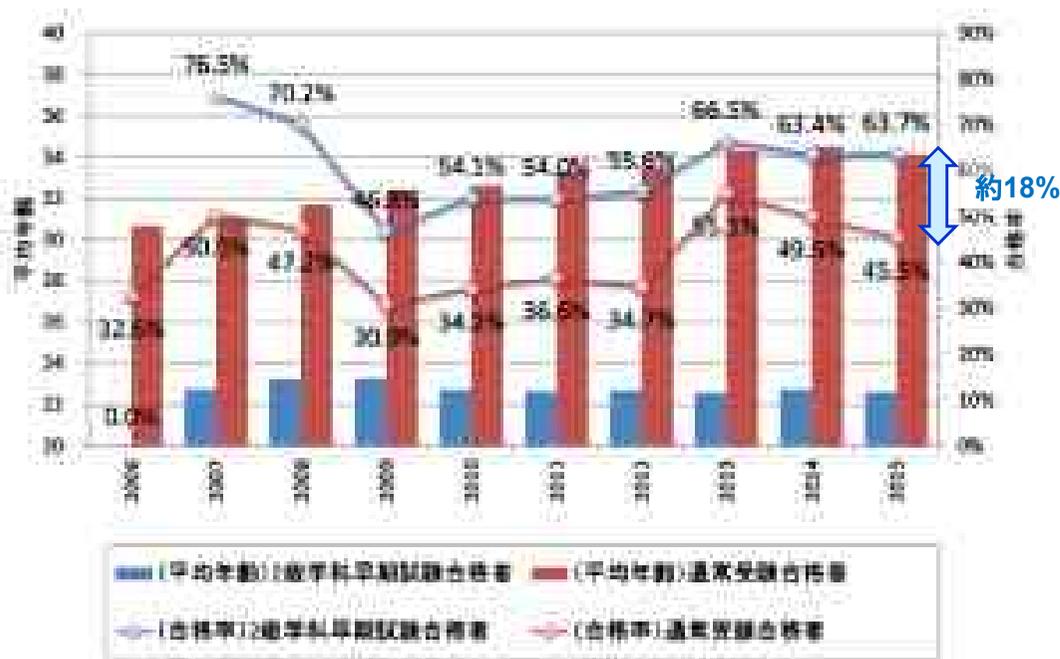
# 技術検定試験の見直し

## 3) 1級学科試験の早期受験

- 2級学科早期試験合格者は、その後の2級実地試験や1級学科試験に早期受験する傾向。
- さらに、2級実地試験では2級学科早期試験合格者の合格率が高い傾向であるとともに、その後の1級学科試験でも、2級学科早期試験合格者の合格率が高い。

➡ 1級学科試験の前倒しを実施することにより、1級資格の早期取得につながる可能性がある。

2級実地合格者における学科試験の受験方法別の平均年齢・合格率<sup>1)</sup>



出典) 1) 2) (土木) 施工管理技術検定データより

1級学科合格者における受験方法別の平均年齢・合格率<sup>2)</sup>

2級学科早期試験合格者は、通常受験(2級学科+実地)者よりも合格率が10%程度高く、2級未取得者よりも20%程度高い



- 2級試験と同様に、1級の学科試験についても早期受験(前倒し)の検討を進める(具体的な受験要件及び導入時期については今後検討)